岩井　昌子　司書　まなびお図書室



『赤毛のアン』

モンゴメリ　　村岡 花子 訳

アンがさまざまな経験を通し、人として成長する物語。

出会いは中学生の頃ですが、アンが成長していく姿を自分の年齢や暮らしに重ね、何度も読み返しています。

この本を読むと「失敗しても大丈夫」と思えるし、いつでも帰る場所があることにも気付かされます。

また、自分の信念を大切にしたくても、思い通りにいかないアンの姿に共感し、悩みながら進んでいくのは自分だけではないのだと感じます。

子育ての悩みや両親との関わり方など、日々の暮らしを振り返るきっかけになって、読む時期によって新たな気付きや勇気をもらえる一冊。ぜひ、幅広い年代の方に読んでほしいです。

木村　由佳　司書　まなびお図書室



『ふたりの読書会』

向井 和美

無期受刑者から届いた１通の手紙をきっかけに、文通を通して本について語り合う「ふたりの読書会」のお話です。

この本を通して「本はどんな人に対しても平等である」ということを、まっすぐに受け止めることができました。

私が司書になったのは、人生で一番つらいときに、本に助けられたからです。ただ、これまで何度も本に助けられてきたにも関わらず、本に対しての思いを言葉にできていませんでした。この本を通してその思いを言語化できたことで、本を扱う仕事をしている自分自身も救われた気がしています。

本との「出逢い」を通して、一人でも多くの人が救われること。それが司書としての私の願いです。

谷　彩　司書　まなびお図書室



『シーラという子』

トリイ・L・ヘイデン　　入江 真佐子 訳

６歳で傷害事件を起こし、トリイが受け持つ教室にやってきた少女シーラ。虐待などによって心身に深い傷を負った少女が、１人の教師との出会いを通して、少しずつ心を開いていく姿を描いたノンフィクション作品です。

高校生の頃、図書委員をしていたときに出会った作品で、一気に読破したことを覚えています。また、虐待を受けた子どもの心やその背景にある問題に関心を持つようになり、福祉を専門的に学びたいと思ったきっかけの本でもあります。

一度読んだだけなのに、ずっと心に残る一冊。

子どもに関わる仕事に就きたいと考えている方はもちろん、子育てをしている方にも、ぜひ読んでほしい一冊です。

山崎　沙紀　司書　まなびお図書室



『教養としてのコーヒー』

井崎 英典

第15代　ワールド・バリスタ・チャンピオンが綴る、コーヒーを知ることで世界の歴史や情勢が見えてくる一冊です。

コーヒー好きの私が、書棚に並べる準備をしているときに表紙に惹かれ、気になったのが出会いのきっかけでした。

興味深かったのは、コーヒーの楽しみ方に表れる文化の違い。欧米ではエスプレッソが親しまれている一方、日本ではドリップコーヒーが広く飲まれています。華道や茶道のように、あえて手間をかけて一杯の美味しさを追求する。そんな、過程を大切にする日本人の考え方に共感しました。

コーヒー好きの方はもちろん、日々を忙しく過ごしている方にもおすすめの一冊です。